

まんのう町教育委員会だより

爽そうふう風

子どもの健やかな成長を願って

Vol. 30

令和4年【2022】

4月1日 発行



特集 学校は どう変わってきたか

Contents

P.6～7 園・学校ウォッチング
長炭小学校・琴南こども園

P.8 「いのちのせんせい」から学ぶ
P.9 シリーズ「声」

P.10 ホットニュース
P.11 関係機関から

閉ざされた尊い存在から 開かれた対等な場所へ

学校に行くのを「登校」、帰るのを「下校」と言います。なぜでしょうか。
江戸時代、多くの城は山城でした。そこで、家来が城に行くときを「登城」、帰るときを「下城」と呼びました。登城のときは普段着を袴に着替え、たたずまいを正したと言います。

また、当時の武士の男子が通う学校は「藩校」でした。藩校は必ずしも高いところにあったわけではありませんが、学校は尊いところだという考えから「登校」「下校」と呼ばれ、その言葉が残ったと言われています。

(参考：千葉敬愛短期大学学長 明石要一「地域学校協働本部とは何か」)

明治5年、「学制」の発布により、日本の近代学校制度が始まりました。以来、学校は長い間、子どもが先生と過ごす、閉ざされた空間でした。「登校」「下校」という言葉に象徴されるように、先生から勉強を教えてもらう尊い場所だったのです。

しかしながら、時代とともに学校や先生に対する社会の見方は変容していきました。また、社会の変化に伴って、先生方には授業以外にも取り組まなければならない課題が次々と生まれ、その仕事内容は、年々多様かつ複雑になってきています。さらに、子どもたちが変化の激しいこれからの社会を生き抜いていく力を身につけるためには、学校を開き、社会や多様な人々とつながりながら学ぶことが不可欠になりました。

このような状況の中で、学校は今、多様な専門家や専門機関、そして地域や保護者と役割を分担し、連携しながらその機能を強化していく——そんな、「チーム」としての学校づくりを推し進めています。

「チーム」としての学校

心理や福祉の専門家
SSWer (スクールソーシャルワーカー)
SC (スクールカウンセラー)

教職員
教員
(校長・教頭・教諭・養護教諭・栄養教諭・講師)
事務職員・調理員・用務員



コミュニティ・スクール

学校運営協議会

**教員を支援する
専門能力スタッフ**
ICT支援員
ALT (外国語指導助手)
特別支援教育支援員
学校司書
部活動指導員

**地域の人たち
保護者**

特集

学校はどう変わってきたか

— 明治から令和へ 時代とともに変容を続ける学校の姿 —



右の図は明治7年に刊行された林多一郎『小学教師必携補遺』の中の1ページです。林多一郎は、明治5年に設立された師範学校に学んだ人物で、この著書によって、「学校」とはいかなるものかを広く教育界に普及しようとしたようです。

この図のような教室の風景は、長い間、日本の学校の、ごく普通の授業風景として、違和感なく受け入れられてきました。すなわち、教師が黒板を背にして教卓の前に立ち、口授と板書、そして教科書で知識を分かりやすく伝えるという、いわゆる「一斉伝達型」の授業スタイルです。子どもたちは前を向いて姿勢よく座り、教師の話聞いていました。

上の写真は、令和2年度に長炭小学校6年生が、修学旅行で小豆島にある「岬の分教場」を訪れた時の写真です。かつて実際に学校として使われ、昭和46年に廃校となったこの分教場も、同様に、日本の伝統的な教室の様子をよく表しています。

一方、下の写真は、令和3年度の高篠小学校6年生の授業風景です。ずいぶん様変わりしていることが分かります。変わったのは授業だけではありません。学校は、時代とともに少しずつ変容を続けてきたのです。



(出典：文部科学省ホームページ)

日本の近代学校制度が始まったのは、「学制」が公布された明治5年。





総合的な学習の時間（小学校3年・中学校）

変化の激しい社会に対応できる「生きる力」の育成を目標に、平成14年度に生まれました。教科の枠を越えた学習を行う時間で、子どもたちには、教科で身につけた知識や技能を活用して主体的に課題を解決していくことが求められます。



生活科（小学校1・2年）

小学校低学年の社会科と理科を統合して、平成4年度にできた教科。具体的な活動を通して思考する低学年の特徴に合わせて、直接体験を重視しています。幼児教育から小学校教育へのつながりを滑らかにするねらいもあります。

新しく生まれた
教科や活動

時代が変えた

学校のあれこれ…



特別の教科「道徳」（小・中学校）

教科外の領域だった「道徳」は、平成30年度から教科になりました。背景に、後を絶たない「いじめ問題」があります。教科になったことで、授業時間がきちんと確保され、ねらいも明確になり、心の教育が充実すると期待されています。



外国語（小学校5・6年）

平成23年度から必修となった小学校高学年の「外国語活動」が、令和2年度に教科「外国語」になりました。小中の授業の連携をスムーズにするとともに、グローバル化が進むなかにあって、使える英語力を身につけていくことが目的です。



蕎麦の土寄せ



陶芸教室



緑米開花観察

地域の人たち

教員ではない
いろんな先生

様々な機関や団体から



非行防止教室

（香川県警察本部・香川県教育委員会）



サッカー教室（カマタマーレ讃岐）



教師は、黒板を背にして前にいるだけでなく、子どもたちの中に入り、その学び合いに耳を傾けています。



子どもたちは教師の話を聴くだけでなく、子どもたち同士で考えを聴き合い、学び合います。活動によって、座席の配置も様々に変化します。



ICT機器を効果的に活用しながら学んでいます。



男女混合名簿

学校で使用する児童・生徒名簿は、50音順などに並べられ、長い間、男子→女子の順に整理されていました。現在は、「男女混合名簿」を導入する学校が増えています。

まんのう町内では、すべての小中学校で「男女混合名簿」を使用しています。



色とりどりのランドセル

長い間、ほとんど男子は黒、女子は赤だったランドセル。ピンクや緑、水色など色とりどりになったのは、平成に入ってからです。個性や好みで好きな色を選べる時代になり、男子だから何色、女子だから何色といった考え方は薄れつつあります。同様に、中学生の標準服も、男子は詰襟にズボン、女子はセーラー服にスカートが一般的でしたが、男女の別をなくして自由に選べるようにする取り組みが始まっています。



更衣は自分で決める

この写真は、町内小学校1年生の冬のある日の様子です。服装に注目してください。ポロシャツ1枚の子、ベストを着ている子、冬服の子と様々です。

以前は、季節が変わるたびに、期日を決めて全校生が一緒に更衣を行いました。現在は、子どもたちが自分の体調と相談しながら自分で服装を選ぶこと、つまり「自己決定」することを大切にしています。



人権教室（人権擁護委員）



生活習慣スクールキャラバン（香川県教育委員会）

豊かな自然や伝統、いつも子どもたちを温かく応援してくれる地域の方に支えられ、異学年同士もたいへんなかよく、楽しい学校生活を送る長炭小学校。本校では、「かわり合い」「つながる」とを大切にしています。

はじめに、みんなでこんな学校をつくらう、こんな子どもたちに育ってほしいという願いを込めた「学校教育目標」「めざす子ども像」を次のように定め、学校だけでなく、保護者や地域の方と大切なことを確かめ合ったり、共有したりしながら、日々の教育活動に取り組んでいます。

【学校教育目標(令和3年度)】

自立に向かう教育の創造

― 共感し、プラスでかわり合おうとする子どもを育てる ―

◆ 認め合い、かし合い みんなが元気の学校

◆ 保護者との太い絆や地域との温かい関係を土台にする開かれた学校

【めざす子ども像】

● じつくりと学び続ける子

● 前向きにかかわろうとする子

● 故郷(地域)を大切に想い続ける子

本校がこれまで大切にしている、これからも大切にしていきたいことである「かわり合い」「つながり」「認め合い」「共感」「関係づくり」が表現されています。

さて、ここからは具体的に、自然やもの、そして人とのかわり合いによる学びの様子を、「授業」と「体験活動」を中心に紹介します。

子どもたち同士が「つながり」、全員が主役になる授業づくり

学習の場面でも、主役は子どもたち。どの子どもも分かる、できる喜びを持てる授業づくりをめざしています。

子ども同士が「つながり」ながら、主体的に聴き、話し合い、学ぶためには、困っていることが言えること、うまく話せなくてもいい、その子なりの言葉が出るような安心できる環境づくりが基盤になると考え、「聴く」「話し合う」「ルールを次のように定めています。



かわり合い つながるよろこび
長炭小学校

「話し合い」のルール★長炭小バージョン

3つの約束

- ① 誰かがいっぱいしゃべり、誰かは言わないはダメ。
- ② 人の意見を簡単に否定しない。
- ③ 質問する。

★「分らない」「困ったなあ」が出し合える関係づくり

また、本校でもICT環境の整備が進んでいます。日常の学習活動でも、その便利さや楽しさを子どもと教師で共有しながら、一人1台の機器を使った学びが多くなっています。より効果的に活用できるよう、教職員間で研修や情報交換を行うなどして、充実を図っていきたく考えています。



互いの考えを大切にしながら

地域とのつながりによる
生の体験を大切にしたい学びづくり

地域は大切な学びの場です。「つながりの宝庫」地域へ出かけよう―を合言葉に取り組んでいます。

★4年生・環境プログラム 国営讃岐まんのう公園 春、夏、秋、冬と季節ごとに、その自然に触れてきました。みる、きく、さわる、におう、そして、肌でかんじる…本物、生の体験は宝です。

★2年生・さくらんぼ農園体験(地域の農園訪問) 今年も2年生が、地域のさくらんぼ農園に行くことができました。やさしいおじさんとおばさんにさくらんぼを収穫させてもらったり、箱詰めを教わってもらったり。楽しい種飛ばし大会もしました。このさくらんぼの味はすっかり忘れられないでしょう。

他にも、公民館、校区青少年育成会議等、日頃から子どもたちを応援してくれる地域のの方に、学校だけでは経験できないさまざまな活動を提供してもらっています。



ようし、遠くまで飛ばすぞ〜

令和4年度も、プラスでかわり合う経験を通してお互いをより大切にする心を育み、それぞれの個性を認め合うことで互いに元気になれる関係づくりを大切にしていきたいと思っています。

琴南こども園では、地域とのつながりを大切にし、琴南らしい自然をいかした自然とかかわる体験を通して感性を育んでいます。そして、子どもたちの「やりたい」「思いを大切にしたい保育を、職員も、ともに楽しんでいます。

琴南の自然を満喫 ～山登り～

5歳児白組が「夜までらんらん保育」で竜王山登山をしました。地域おこし協力隊の水沼さんの協力を得て、香川県で一番高い山に登ったのです。

新型コロナウイルス感染症の影響でお泊り保育がなくなり、いつもの年とは違う「琴南でなくてはできない体験がしたい」という担任と5歳児の思いで実現した山登り。

最後の坂では急なルートを選んだ子どもたち。6人で支え合いながら、最後まであきらめず頂上に辿り着いたその顔は、自信に満ち溢れ、とても満足そうでした。

笑顔いっぱいの子もたちを見ていて、こちらまで嬉しくなります。「コロナ禍でたくさんのご制限された子どもたちですが、こども園生活において心に残る大きな経験になりました。



最後の急斜面

木登りに挑戦

ふるさとめぐりでお世話になっている地域の方からのお誘いで、柿畑に木登り体験に行きました。

はじめは緊張し、怖くて登れなかった子も、何度も挑戦していくうちに自分で登れるようになり、大満足。柿畑のあちこちから「上までいけた」「見て見て」と嬉しそうなお声が響いていました。

家庭ではあまりできない貴重な経験から、子どもたちの挑戦意欲が育まれています。



木登り体験

命の大切さに触れて

昨年度から子どもたちみんなで大切に世話をしていた、つぎのハッピーちゃんとの突然の別れ。毎日、餌をあげたり小屋の掃除をしたり。ハッピーちゃんの周りは子どもたちの笑顔でいっぱいでした。悲しい日々が続いていたある日、地域の方がつぎを届けてくれました。



めめちゃん

「可愛いなあ」「ハッピーちゃん、帰ってきたな」と大喜びでした。みんなで名前を考え、「めめちゃん」に決定。毎朝、めめちゃんのゲージには子どもたちが寄ってきます。お家の人と離れるのがちょっぴつらい小さい子も、めめちゃんを見たら、元気に部屋に入れます。すっかり琴南こども園の一員になっためめちゃん。子どもたちはハッピーちゃんとめめちゃんから、命の大切さを学んでいます。

琴南こども園の宝物「ふるさとカルタ」

琴南こども園には、園独自に製作した宝物のカルタがあります。ふるさと琴南のことが大好きな子どもたちに育って欲しいという願いのもと、平成24年度から保護者に協力をお願いして、毎年少しずつ枚数を増やしている「ふるさとカルタ」です。私たち職員が知らない場所やふるさとへの思いの詰まったカルタができあがっています。子どもたちはそのカルタを使ってカルタとりを楽しみます。

1月には3〜5歳児が、カルタに歌われていた久真奴(くまの)神社に初詣に行きました。風の強い日でした。神社の前に来たら、不思議なことに風がぴたっとやみました。「神様が見よんかな」「神様が止めたんかな」と口々に言いながら、家庭から持ってきたお賽銭を入れてお参りをしました。



ふるさとカルタ

令和3年度も、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、色々な行事が中止や制限されました。そんな中でも子どもたちは、地域の方の協力を得て、様々な体験をすることができました。琴南地区の温かい人々の思いに触れながら、今後子どもたちとともに成長していきたいと思っています。



シリーズ『声』

第16回「GIGAスクール元年」を終えて

児童生徒にタブレットが1台ずつ配置され、「GIGAスクール元年」と言われた令和3年度。授業をはじめとする学校の教育活動は、それまでとどのように変わったでしょうか。

その学校で研修の中心となって授業改善に取り組む2名の先生に、「GIGAスクール元年」を振り返ってもらいました。

つながりを広げて

タブレットPCを使って調べものをしたり表現物を作成したり、電子黒板を活用して意見を共有したり…。令和3年度にICTが充実してから、子どもたちの学びの機会は大きく広がったように思います。

ここ2年間で、新型コロナウイルス感染症の広がりにより、修学旅行や校外学習など、様々なところで子どもたちの学びは制限されてきました。また、学校外の人と触れ合う機会もなく、教師と友だちという限られた人とのつながりだけとなっていました。

このような状況でも、子どもたちが本物を見て、聞いて、感じる学びをすることはできないかと考え、社会科の学習でオンライン会議システムを活用しました。

南海トラフ地震への備えについて考える学習では、まんのう町役場総務課の方とオンラインでつながり、子どもたちが考えを伝えたり質問したりできるようにしました。すると、子どもたちはその時間を楽しみにし、授業で考えてきたことを自分の言葉で積極的に伝えていました。

オンライン会議システムを活用することで、実際に会うことはできなくても、相手の言葉や表情から、自分の生活の安全を守ってくれている人たちの思いに触れ、社会とのつながりを感じることができたようです。また、その学習が終わった後も、総務課の方を見かけると嬉しそうにあいさつする姿を見かけました。

この事例は、町役場という、地域に深く関係する人とながたの学習でしたが、ICTを活用すれば、日本全国、そして世界中の人とも学校で顔を見ながらコミュニケーションをとることが出来ます。

ICTはこれからの子どもたちの世界を広げ、つながりを広げるものであり、今後その様々な可能性を探っていきたいと考えています。



満濃南小学校 教諭 乗松 直樹

学びに向かう力

令和3年度より、生徒一人ひとりが1台の端末を持つ学校生活が始まりました。どのようにICTを活用していくか、期待と不安が入り混じる中でスタートであり、とにかく使用していくことが目標でした。

生徒は常に机の横に端末を携帯し、いつでも使えるようにしています。授業中のみならず、休み時間にも調べ学習に活用している姿が見られました。授業では、道徳で自分の心情を表すのに用いたり、学習ドリルに活用して、基礎・基本的な学力の定着に努めたりしています。

他にも、全校集会や小学生の体験入学をオンラインで行うなど、幅広く活用しています。さらに教員の指導力向上を図るため、情報機器の扱いに長けている若手の先生方を中心に使用方法を共有したり、講師を招いて研修を行ったりしているところです。

さて、いざ授業で使ってみると、これまでになかった場面に多く出くわしました。特に大きな変化と感じたのは、「視線」です。

これまでは、「前を向いて」が授業におけるスタンダードと思っていたところがありましたが、端末を用いるようになると、生徒は気になったタイミングで調べたり、友だちと意見や情報を共有したりするようになり、様々な方向を向いて学習する場面が多くなりました。

当初はこの状況に戸惑うこともありましたが、生徒が夢中になって学んでいる姿を目の当たりにすると、今はその環境を活かしつつ、どのようにして全員で共有していくかが重要であると感じています。「教える」だけでなく、いかに「つなげる」かが、今後の大きな課題の一つです。

まだまだ分からないこと、試したいことがたくさんあり、効果的な活用方法を模索していかなければならないと感じています。生徒の新しい環境に適応する力には学ばねべき点が多くあります。生徒に負けないように、私も学びを追求していきたいと思っています。



満濃中学校 教諭 端山 陽介

「いのちのせんせい」から学ぶ ～ 生きることの意味や命の大切さ ～

「いのちのせんせい」とは

日々の業務やこれまでの人生の中で「生」や「死」と向き合った経験をもとに、生きるものの意味や命の大切さなどについて深く考えさせる話をしてくれる人を「いのちのせんせい」として学校に派遣する、香川県教育委員会の事業。令和3年度、まんのう町内では6校で実施された。

講師の先生の動きに合わせて
手話を体験する子どもたち



聴覚障害者は、見た目では障害があることが分かりにくいので、まわりがそのことに気づかずに起きてしまう事故もあることを知りました。

子どもたちは、自分に何ができるかを考えるとともに、障害者を支援する仕事について関心を持つ機会にもなりました。

7月12日 長炭小学校

手話通訳士



セラピー犬『アロー』と触れ合う
子どもたち



子どもたちは、セラピー犬と実際に触れ合うことで、人に与える癒しの効果を体験できたようです。自分が犬になって、人間役の友だちとかかわってみることで、人間の思いだけでなく動物の思いも大切にしなければならぬことが、実感として分かりました。

11月1日 仲南小学校
11月26日 満濃南小学校

セラピードッグ トレーナー

助産師

助産師の仕事や胎児の成長の様子、そして、今教室にいる子どもたち一人一人の命が、いかに奇跡のようなものであるかを、写真や具体的な数字を示しながら分かりやすく説明してくれました。

12月3日 満濃中学校
1月19日 高篠小学校

生命の不思議と
いのちの尊さを学びました。



折り紙をかざし、受精卵の大きさに
空いた小さな穴を探す子どもたち



原爆被害者 語り部

12月14日 四条小学校

原爆被害の悲惨さや投下前後の広島町の様子などを、資料を交えながら分かりやすく話してくれました。力をこめてゆっくりと、一つ一つ確かめるように語りかけるその体験談からは、戦争の愚かさと平和の大切さを子どもたちに伝えたいという強い思いが、ひしひしと伝わってきました。

語り部の話に
じっと耳を傾ける子どもたち



- 一つの遊びを続けられず、次々と変わる。
- 活動の途中で注意が移り、集中しない。
- ゲームに夢中になると、途中で止められない。
- 不注意なケガをよくする。
- 失くし物・忘れ物が多い。
- いつも同じ間違いをする。
- 授業中、ぼうつとしていることが多い。
- 整理整頓ができない。

- 1 持続的注意**
特定の対象に向けた注意を持続させること。「**続ける力**」としての側面がある。
- 2 選択的注意**
複数のものの中から適切な対象を選び、注意を向けること。「**選ぶ力**」の側面がある。
- 3 配分的注意**
複数の対象に同時に注意を向けること。「**同時にみる力**」という側面がある。
- 4 注意の転換**
注意を向けた対象から別の対象へと注意を向け直すこと。「**切り替える力**」という側面がある。

幼児から中学生までの保護者や担任から受ける相談は、次のようなものです。

「一つの遊びを続けられず、次々と変わる。活動の途中で注意が移り、集中しない。ゲームに夢中になると、途中で止められない。不注意なケガをよくする。失くし物・忘れ物が多い。いつも同じ間違いをする。授業中、ぼうつとしていることが多い。整理整頓ができない。」

これらの原因の一つに、注意集中の弱さがあるのではないかと考えられます。それは、ADHD特性の一つである「不注意」とよく似ています。この「不注意」は、幼児期ではどの子にも多少少なからずあることで、見つけにくいのは仕方のないことです。小・中学生でも気づかれにくく、ただ単に「気が緩んでいるだけ」と思われがちで、叱責や励ましの声かけだけで、本人の努力のみを求めてしまうことがよくあります。しかし、特性が強い場合、本人の努力だけでは乗り越えられず、叱られることが増えてしまい、自暴自棄になってしまつていくことがあります。それを防ぐためには、それぞれの子どもが苦手な「不注意」に合わせた対処方法を見つけ出していく必要があります。

例えば、「**持続的注意**」が弱い子には、同じ課題を長く続けるのではなく、取り組む時間を短くしたり区切りをたくさん入れたりと、注意集中する時と発散する時を明確にする支援があります。

「**選択的注意**」が弱い子には、大事な物には目立つように印をつけたり、不必要な物は見えないようにしたりして、大切なものを強調する必要があります。

「**配分的注意**」が弱い子には、注意する範囲を制限し、注意の対象を少なくするなどの工夫が必要です。

「**注意の切り替え**」が弱くて、**ずっと続ける子には**、本人と事前に活動時間を決め、タイマーで時間制限をしたり、次の活動を準備してから新たな活動に誘ったりするなど、その子の状態と環境に応じた対処が必要となります。



(※写真と本文は無関係です)

注意の問題は、乳幼児期から始まり、大人に至るまで様々な場面で支障が出てくるものです。以前、マスコミで話題になった「片づけのできない大人たち」も、注意集中の問題が背景にあると指摘されていました。

子どもたちが大人になった時にできるだけ大きな困難を抱えずにすむように、幼児期から個々の子どもの特性に応じた支援を積み重ねていき、改善できる方法を探し続けていくことが重要だと考えます。

※「たむ」では、子どもの様々な成長発達上のつまずきや困難にかかわる相談支援を行っています。その中で気づいたことや伝えたいことを、「たむ」通信」でお届けします。

早期支援教育センター

「たむ」通信



その2 「注意」

大人はふつう誰でも、「自分の意志で注意を集めることができる」と思われており、「**注意**」に関してそれほど意識しないものです。しかし実際は、その注意集中がうまく働かず、生活に支障が出る人もいることが分かっています。

そこで、「**注意**」について改めて考えてみることにします。注意とは、「特定の事柄に意識を向けること」とされ、機能として次の4つが挙げられます。

令和3年度を振り返り
次年度を展望する

テーマ 次年度の園経営について
～これからの就学前教育の充実に向けて～



園長教育懇談会 (R3.12.24)

園長、教育委員、事務局職員が参加して、園の現状や育てていきたい子どもの姿、次年度の園経営の構想等について、熱心に意見交換しました。

毎年、教育研究所主催により、園長・校長を対象に実施している教育懇談会ですが、1月26日に予定していた校長教育懇談会は、コロナの感染状況悪化により、中止としました。

総合教育会議 (R4.1.19)

平成27年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部が改正され、教育委員会制度が新しくなりました。これに伴い新設された「総合教育会議」が、今年度も開催されました。

今回の総合教育会議では、コミュニティ・スクールやこども園の運営、学校におけるコロナの感染予防などについて、活発に協議がなされました。



第45回 全日本アンサンブルコンテスト
中讃地区大会
(満濃中 吹奏楽部：R3.12.26)



サクソス四重奏



(福本 有妃子・香川 結月・梅木 結愛・長原 莉子)



打楽器四重奏



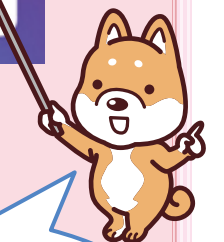
(小松 愛佳・岩本 侑夢・富田 結・川口 莉央)



まんのう町教育委員会
公式Instagramについての



MANNO_KYOIKU



ユーザー名を変更しました!
すでに、たくさんのフォローをいただき、ありがとうございます。今後とも、よろしくお願いします。



編集後記

新聞で読んだ投書に、思わず顔がほころびました。それは66歳の女性のもので、その方の息子さんが小さかった頃のエピソードです。

息子さんに近くのスーパーまでお使いを頼んだところ、何も買わず泣きながら帰って来たそうです。どうしたのかと尋ねると、「おいしいシールの牛乳がなかった」と言って泣くばかりだったとか。

その方は、いつも割引シールが貼られた牛乳を買っていて、息子さんに「何のシール？」と聞かれると、「これはおいしいシールだよ」と答えていたということです。家計を節約しながら、それを小さな楽しみに変え、我が子と共有しているお母さん、素敵ですね。息子さんはお母さんがいつも買ってくれる「おいしいシール」付きの牛乳を、どんなにか買いたかったことでしょう。

コロナ禍の今は不安やストレスを感じる事が多く、思考の針は、ともすればマイナス方向に触れがちです。このようなときにこそ、「おいしいシール」のようなプラス思考を大切にしたいものです。

厳しい現実だからこそ生まれた、愛に溢れる曲があります。ルイ・アームストロングの名曲として知られる「What a wonderful world (この素晴らしき世界)」。

1960年代、激化の一途をたどるベトナム戦争を嘆き、平和な世界を夢見たジョージ・ダグラスによって作られました。緑豊かな木々、赤いバラの花、どこまでも続く青空と

白い雲…なんて素晴らしい世界なんだ、この素晴らしい世界を見てごらん — と、歌はやさしく私たちに語りかけます。

この曲は、東京パラリンピック閉会式でも演奏されました。ピアノを担当したのは「7本指のピアニスト」西川悟平さん。脳の神経疾患「ジストニア」を患い指が動かなくなった彼は、並々ならぬ努力により、7本の指でピアノを演奏できるまでになりました。

そこには、彼をプラス思考へと転換させた、ある幼稚園での出来事があります。当時指が5本しか動かず、へんてこな指使いで演奏した「きらきら星」。その演奏を、指のことなどお構いなしに喜び、歌い、踊り、心から楽しんでくれた子どもたち。その姿が、「5本しか動かない」という彼の絶望を、「5本も動く」という希望に変えたのです。今、西川さんは、魂を揺さぶる美しい演奏で聴衆を魅了するピアニストです。

さて、いよいよ新学期。新しい学年の始まりです。まだまだ制約の多い毎日が続きますが、子どもたちの心の針がプラスに触れるようなかわりを心がけていきたいものです。子どもたちが、日々の小さな出来事に喜びを見出しながら、夢をもって前向きに努力していける毎日になるよう、願ってやみません。

(Y. T)

表紙絵：東山 正章 (元満濃中学校長)

次号予告
(6月1日発行)

特集 縦のつながりが育むもの

図・学校ウォッチング

仲南小学校・四条こども園